

【研究ノート】

国立教育政策研究所紀要 第136集

「北京・持続可能な発展のための教育園」における教育活動

Educational Activities at the ■Beijing Education for Sustainable Development Field■

鶴見 陽子*
TSURUMI Yoko

Abstract

■Sustainable development■ in terms of the economy, environment and society is the most critical issue in today's China. Following international trends, China has already adopted policies and created strategies on ■Sustainable Development■ and ■Education for Sustainable Development (ESD).■ This research note examines ESD in China, focusing on the educational activities at ■Beijing Education for Sustainable Development Field (ESD Field)■ which was established in the eco-village known as ■Beijing Xiedao Holiday Village (Xiedao).■

Xiedao has achieved a harmonious development of the environment and the economy by means of a cyclical economy with the two pillars of ecological agriculture and tourism in the suburbs of Beijing. ESD Field organizes various educational activities, including learning by experience and observation, so that students can learn organic farming, resources and energy recycling systems, not to mention Chinese tradition and culture, etc.. Xiedao is also described as a model for urban agriculture and a cyclical economy in the ESD textbooks developed for elementary and junior high school students in Beijing.

Although ESD Field sponsors various educational activities, further considerations based on the ■DESD International Implementation Scheme (IIS)■ have raised several issues concerning those efforts. It facilitates a learning model in which students learn ■achievement■ of cyclical economy under the fixed relationship of ■teacher-learner.■ Nevertheless, it prevents students from fostering one of the main ESD characteristics, ■critical thinking and problem solving skills,■ and creating ■values,■ which is a central aspect of ESD.

ESD should have sufficient momentum to recognize and assess existing values, and create alternative values, since ESD itself is a value. This is one of the criteria for assessing ESD practices. It is thus a matter of major concern to me to deepen understanding of theories and practices for ESD in China in terms of ■values,■ and define China's ■development philosophy■ and ESD in that country.

はじめに

「持続可能な発展¹」は、「科教興国」（科学と教育で国を興す）戦略とともに中国の二大発展戦略に定められている。周知のとおり、1980年代の改革・開放政策後における中国の発展は目覚しく、

* 研究協力者

1979年から2004年までの平均経済成長率は9.4%に達した²。しかし、急速な経済発展は様々な歪みを残し、なかでも環境問題と経済格差は発展戦略における重要課題となっている。

「持続可能な開発」及び「持続可能な開発のための教育」(Education for Sustainable Development、以下 ESD と略称) が国際社会で提唱されてから久しいが、中国はいち早く国際的動向に応じ、既に具体的な政策の策定や実践を積み重ねてきている。1992年「環境と開発のための国連会議」(通称「地球サミット」) の成果文書である「アジェンダ21」は、各国に持続可能な開発に関する戦略と計画、政策の構成と実施を求める行動指針であるが、これを受けて中国政府は環境と発展の促進のための「環境と発展の十大対策」(「環境と発展十大対策」) を打ち出し、また国務院環境保護委員会は国家計画委員会と国家科学技術委員会のイニシアティブのもとで国内向けのアジェンダを制定することを決定、1994年の国務院第16回常務会議の通過を経て、「中国21世紀アジェンダ」(「中国21世紀議程」) を公布した。その後、環境問題や「持続可能な開発」に関する政策や施策の多くは、「中国21世紀アジェンダ」の枠組みにおいて取り組まれており、1995年の「国民経済と社会発展の第9次5ヵ年計画と2010年長期目標」(「国民経済和社会発展“九五”計画和2010年遠景目標」) はその代表的なものである。

これらの政策は中国の ESD の礎石となっており、ESD の実践も早い時期から見られる。現在、中国の ESD の推進は教育部及び国家環境保護総局が主流となっており、北京師範大学と世界自然保護基金(WWF) の協力下で教育部が進める「中国小中学校グリーン教育活動」(「中国中小学綠色教育行動」/ Environmental Educators' Initiative; EEI) プロジェクトは、1997年から実施されている。また、国家レベルではないが、中国における ESD の代表的な取り組みである、ユネスコ「環境、人口、持続可能な開発のための教育」(「環境、人口、可持續發展教育」/ Education for Environment, Population and Sustainable Development ; EPD 教育、2006年より ESD に改名) プロジェクトは、1998年から実施された。このように国際的に見ても早い時期から始まった中国の ESD は、2005年からの「持続可能な開発のための教育の10年」(Decade of Education for Sustainable Development、以下 DESD と略称) を受けてさらに活発になってきている。

そこで本研究ノートでは、中国における ESD に着目し、その実践の一つを取り上げる。ESD においては、従来の教育方法とは異なる学習方法が求められ、また学校という枠を超えた教育活動の場が求められる³。中国においても、ESD の質を高めていくために、植物園や動物園、博物館、ハイテク・パーク、企業といった地域資源を活用し、多様な実践・活動の場を設けていくことが課題の一つとしてあげられている⁴。そしてその先駆的な取り組みとして、「北京・持続可能な開発のための教育園」(「北京可持續發展教育園」、以下 ESD 園と略称) というエコビレッジを活用した実践が位置づけられよう。

以下、ESD 園における教育活動の理念と実践を整理し、ユネスコの「国連持続可能な開発のための教育の10年(2005~2014年) 国際実施計画」(UNITED NATIONS Decade of Education for Sustainable Development (2005-2014) International Implementation Scheme、以下 IIS と略称) を用いて考察を加え、今後の研究課題を提起する。

1. 蟹島における「環境と経済」の持続可能な発展

中国国内初の ESD 推進のための NGO、「北京・持続可能な開発のための教育協会」(「北京可持續發展教育協会」、以下 ESD 協会と略称) は、2006年、「北京蟹島エコ休暇村」(「北京蟹島綠色生

態度暇村」、以下蟹島と略称)の協力のもと、ESD 園を設立し、北京の小中学生に多様な教育活動を提供している。なぜ蟹島が ESD の実践の場として着目されたのか。ここではまず、蟹島の持続可能な発展のための取り組みを紹介する。

蟹島は、1998年、北京市郊外の農村に生まれ育った一人の農民、付秀平氏によって設立された農業と観光を経営柱とする企業ベースのエコビレッジである。北京市朝陽区の郊外に約200ヘクタールの広大な敷地を有し、敷地内には巨大な人工池、農地、果樹園、畜産・養殖場、食品加工工場のほかに、バイオガス・プラント、ソーラー・システム、污水处理施設、科学実験施設や各種複合・娯楽施設が建てられ、すべてが有機的に機能している。循環型経済を実現し、エコロジーの原理に基づきながら高い経済効果をあげていることが各界から高く評価されている⁵。

蟹島の循環型経済は、バイオガスを中核に、「植物・動物・微生物」の食物連鎖系統や「生産・加工・消費」の循環系統、水資源の循環利用など、複合的な生態系のなかで実現されている。農業では、化学肥料と農薬を一切使用しない有機農法が用いられ、副産物は畜産・養殖場に飼料として送られる。農作物や畜産物の生産過程及び加工・消費の過程で生じた廃棄物や、家畜や人の排泄物などはバイオガス・プラントに送られ、処理時に発生するバイオガスはエネルギーとしてビレッジ内で再利用され、また処理後に残る液肥は有機肥料として農業生態系統に還元される。

このようなバイオガスを中核にした循環利用のほか、水と地熱資源の循環利用もまた蟹島の循環型経済の基礎をなしている。蟹島で排出される污水はすべて污水处理施設に送られ、処理後は灌漑用水や漁業用水として再利用される。また、2ヵ所の井戸から汲み上げられる温水は、最初はプールや温泉、各種施設の暖房に、次に温室の暖房用やバイオガス・プラントの加熱用に、最後に灌漑用水及び漁業用水として繰り返し利用される。このような資源とエネルギーの循環利用によって、蟹島は農業生産コストを大幅に削減している。

また、蟹島は、農業と観光を結合することで経済効果をさらに高めている。敷地の90%を農業に、残りの10%を観光業に当てており、これが「前店後園」(表に店を構え、裏に農園を控える)また「農遊合一」(農業とレジャーの合一)と表現される蟹島の特徴である。

エコロジー農業は、生産効果や農産物の質を高め、また蟹島の自然を豊かにした。そしてこれは、多くの都市住民を蟹島に引きつけるという効果をもたらし、2005年の観光客数はおよそ100万人にものぼり、生産額は2.4億元、納税額は800万元に達した。このように蟹島は、「環境と経済」の「持続可能な発展」を実現しているのである。

2. ESD 園における教育活動

「持続可能な発展」のための課題、すなわち「環境・社会・経済」の調和は、理念としては受け入れられながらも、具体的な施策を講じることについては敬遠されがちである。しかし蟹島は、この課題を見事に克服しており、これが ESD の教育活動の場として評価される所以である。

ESD 協会は ESD 園の設立にあたり、その機能を次のように整理している⁶。

- 1) 青少年がエコロジー農業と循環型経済についての教育を受ける場所
- 2) 教師が ESD の能力育成訓練を受ける場所
- 3) 首都及び国内外の ESD において達成された科学技術の新しい成果を展示する場所
- 4) 学校間や地域、及び国際的に ESD の共同研究を展開し、交流をはかる場所

2) から 4) の機能は構想中であるため、以下では 1) の機能について見ていく。ESD 園における教育活動は、中国科学院や北京教育科学院などの教育専門家、また ESD に関わる教師や研究者によって組織されたものである。活動目標は次のように設定されている⁷⁾。

活動目標

- 1) 情感目標：実践のなかで、科学技術が農業にもたらす効果と利益、また希望を、身をもって実感し、農村及び農業を愛するという感情を引き起こし、また科学的な創造精神を養う。例えば、温室栽培によって野菜の生産は基本的に季節の影響を受けることなく、年中供給できるようになるなど。
- 2) 認知目標：蟹島の有機農業と循環型経済の模式を理解し、「持続可能な発展」の意味について認識し、農業の基本知識を理解し、実践に参加する。例えば、雑草は農作物に病害・虫害をもたらす、肥料や光を奪い、減産をまねく。早い段階で除草をすると半分の労力で倍の成果をあげることができるが、後の段階で除草をすると労力は倍を要し成果は半分になるなど。
- 3) 技能目標：教師や校外補習指導員の指導のもと、実践的に手を動かす能力を養い、成果を発表し、また農業科学知識を身につけ、家庭に広めていくための能力を養う。

また活動の原則として、1) 実践性の原則、2) 主動性の原則、3) 協同性の原則、があげられている。では、これらの活動目標や原則に基づいて、実際にはどのような教育活動が行われているのか。ESD 園の教育活動に参加する際に配布される『北京・持続可能な発展のための教育園 学生体験活動ハンドブック』に拠りながら整理していく。ESD 園における教育活動は、参観活動単元と体験活動単元に分けられる。

参観活動単元

活動 1：水資源の循環利用

蟹島における一日の汚水量は約800立方メートル、観光シーズン時では1200立方メートルになる。一次処理を受けた重水は酸化池に流され、そこで一定期間を経た水は灌漑用水や漁業用水として再利用される。生徒は、この循環システムの見学を通して、汚水やシステムについて科学的に学ぶ。また水を循環利用することの意味を考え、節水の意識や習慣を養う。

活動 2：バイオガス資源の利用

バイオガスは、蟹島の循環型経済の中心的機能を担っている。バイオガス・タンクに集められた廃棄物は微生物処理され、そこで発生するバイオガスは電気や熱エネルギーとして利用される。また、液肥は有機肥料や殺虫・殺菌剤として農場に還元される。生徒は、廃棄物を資源やエネルギーとして再利用する過程を見学し、バイオガスの原理について科学的に学ぶ。

活動 3：太陽エネルギーの使用

太陽エネルギーは、バイオガスや地熱資源とともに、蟹島における主要エネルギーの一つである。ソーラー・システムが設置されており、作り出された電気は主に街灯に使用されている。生徒は、これらの見学を通じて、環境問題における太陽エネルギーの意義やその経済効果について学ぶ。

活動 4：人工湿地

湿地は、森林や海洋とともに、地球の三大生態系にあげられる。蟹島は、湿地がもつ多様な機能に着目し、人工湿地をつくった。酸化池につくられた湿地には、水生植物を中心とする生態系が再

現されており、水の再生機能を担っている。生徒は、湿地の機能や人工湿地を開発・利用することの意義を理解する。また汚水が濾過される仕組みについて科学的に学ぶ。

活動５：野生動物救助園

蟹島は、北京野生動物保護協会及び北京野生動物救護センターと共同で、野生動物保護園を設立した。動物救護ステーション、負傷動物リハビリ区、動物繁殖区、人と動物のふれあい区、科学展覧区、マルチメディア標本館などが設置されており、生徒は貴重な自然資源としての野生動物に対する関心を高める。

活動６：四合院と農家

蟹島の一角に、北京の伝統的な建築物が再現されている。伝統的な四合院や農家など、その家庭の身分や経済状況によって異なる家屋が24軒設置されている。建物内部では昔の暮らしが再現されており、体験型の観光用として開放されている。生徒は、北京の伝統的な建築について学び、伝統・文化に対する関心を高める。

体験活動単元

活動１：伝統農具と現代農機具

中国では伝統的に農業及び農具を大切にしてきたため、蟹島では伝統農具展示場を設置している。そこで生徒たちは伝統農具を実際に使い、伝統農具から現代農機具への変化を体験することができる。科学技術が現代農業にもたらした影響を理解し、また農民や農業、農村に対する意識を高める。

活動２：耕地労働

蟹島の農地は約33ヘクタールあり、すべてにおいて有機農法が用いられている。小麦やトウモロコシなど作付面積の大きい農作物（大田作物）の栽培エリア、野菜栽培エリア、果樹栽培エリア、採卵エリアに分かれており、生徒たちは収穫作業に参加する。そのなかで労働の喜びや苦しさを味わい、また有機食品の生産過程や農業生産技能について理解する。

活動３：伝統手作りワークショップ - 豆腐づくり

中国人に馴染みのある豆腐は、悠久の歴史を有し、また栄養面や技術面においても中国が世界に誇るべき食品である。そこで蟹島は、豆腐づくりのワークショップを設けている。生徒は、職人の指導のもと、豆腐づくりを体験し、豆腐の歴史や豆腐の栄養などについて学ぶ。また豆腐をはじめとするその他の中国の食文化に対する関心を高める。

活動４：特色のある橋

蟹島には、100メートル幅の水面上に12種のつり橋が設置されている。これらは、様々な自然環境に合わせて作られてきた伝統的な橋である。生徒は、実際にこれらの橋を渡り、橋の発展やそれぞれの橋の機能について理解を深める。また、このような活動を通じて、協同の精神も養う。

以上が、ESD 園において行われている教育活動である。これらの活動は、「ESD 園 - 学校 - 家庭」という一連の学習の流れのなかに位置づけられることが期待されている。まず、蟹島において教育活動が行われる。次に、学校において、ESD 園で活動を通して学んだことを理論的に考え、図書館などを活用しながら学習内容を豊かにする。最後に、家庭において、家庭菜園や資源・水の循環利用など、学んだことを実践に移す、という学習の流れとなる。

3. 蟹島における実践の教材化

蟹島における農業と循環型経済は、ESD の教材においても取り上げられている。中国における ESD 推進機関の一つである北京教育科学研究所と北京 ESD 協会は、ESD の地方教材、『環境と持続可能な発展のための教育』を共同編集した。教材は、小学校低学年を対象とする「小学分冊」及び中学生を対象とする「初中分冊」に分けられる。各教材の構成は次のようになっている。

『環境と持続可能な発展のための教育』小学分冊

| 単 元 | 課 | タ イ ト ル |
|-----------------|-------|---------------|
| 第 1 単元 グリーンな校庭へ | 第 1 課 | グリーンな校庭 |
| | 第 2 課 | グリーン校庭の小さなガイド |
| 第 2 単元 大自然の中へ | 第 3 課 | ナナホシテントウの旅行記 |
| | 第 4 課 | 美しい四季 |
| 第 3 単元 大切な資源 | 第 5 課 | 私の身近な資源 |
| | 第 6 課 | 資源を大切にしよう |

『環境と持続可能な発展のための教育』初中分冊

| 単 元 | 課 | タ イ ト ル |
|----------------|-------|--------------------------|
| 第 1 単元 環境 | 第 1 課 | 北京の交通渋滞の解決の道はどこにあるのか |
| | 第 3 課 | 都市型現代農業 |
| | 第 4 課 | 電子廃棄物はどこへ運ばれるのか |
| 第 2 単元 社会・文化 | 第 2 課 | 私たち共通の世界遺産 |
| 第 3 単元 経済 | 第 5 課 | 循環型経済へのアプローチ |
| 第 4 単元 持続可能な発展 | 第 6 課 | “中国芯” [*] による啓発 |

* 中国が開発したコンピュータの中央処理装置（CPU）のこと。

蟹島は、「初中分冊」の第 3 課「都市型現代農業」と第 5 課「循環型経済へのアプローチ」において登場する。各課の学習目標は次のとおりである。

第 3 課「都市型現代農業」学習目標

- 1) 北京の現代農業の発展に力を捧げるという責任意識を打ち立てる。
- 2) 北京の都市型現代農業の発展の現状を理解する。
- 3) 資料調査、ケース分析、実地調査などの活動を通じて、北京の都市型現代農業の発展の必要性を理解する。

第 5 課「循環型経済へのアプローチ」学習目標

- 1) 資源保護の意識を打ち立て、資源を循環利用することの緊迫感や責任感を強化する。
- 2) 循環型経済の内容と、生活のなかで資源を循環利用する方法を理解する。
- 3) サミットのシミュレーションなどを通じて、生徒が循環型経済の理念をもって実際の問題を解決するための能力を培う。

各課には、生徒が段階的に学習を深めていけるように、「予習と探求」、「活動と交流」、「学習と再考」、「継続的探求」の 4 項目が設けられている。以下では、蟹島が、各課の学習過程のなかで教材としてどのように扱われているかを見ていく。

第3課では、「予習と探求」の資料として蟹島が扱われている。生徒は、予習の段階で蟹島の実践を読み、「都市型現代農業の発展は、社会主義の新しい農業の建設にとってどのような重要な意味をもつのか」、思考をめぐらせる。「活動と交流」では、フィールドワークが行われるが、蟹島はそれらの選択肢の一つとなっている。「学習と再考」においては、都市型現代農業とは何か、北京はなぜ都市型現代農業を発展させる必要があるのか、そして農業生産の発展と生態環境の改善を結び付ける都市型現代農業の発展が「持続可能な発展」の実現につながるということを、フィールドワークをふまえて学習する。最後の項目、「継続的探求」では、蟹島以外の「観光農業モデル園」の資料など、考察をさらに深めていくための情報が提供されている。

第5課では、循環型経済のモデルとして、蟹島における「穀物・野菜生産 - 人々の飲食消費 - バイオガス発酵 - 穀物・野菜生産」という資源とエネルギーの循環図が紹介されている。この循環図をふまえ、「予習と探求」では、生徒は自ら廃棄物を再利用した経験を振り返り、「活動と交流」では、グループごとに家庭にある資源の循環利用について研究する。「学習と再考」では、循環型経済とは何か、また身近な資源の節約もまた循環型経済の一部であり、身近なところで自分に何ができるかなどについて学習する。最後の項目、「継続的探求」では、循環型経済を実践する企業などについて調査を行うよう促している。

4. IIS による ESD 園教育活動の検討

以上、地域資源としての ESD 園がどのように活用されているのか、ESD 園の教育活動及び ESD 教材を整理した。最後にこれらの教育実践を対象化するために、IIS を用いて考察を加える。

IIS とは、DESD すなわち「ESD の10年」の「道筋」を示す戦略文書である。2002年12月の第57回国連総会において DESD の実施が決議された際に、DESD の主導機関であるユネスコにその策定が求められ、国連関係機関や学者・専門家などとの協議を経て、2005年8月の第172回ユネスコ執行委員会において採択された。IIS は、DESD の目的と目標、ESD で扱う課題や ESD において重要な役割を担う価値観について、また、「ミレニアム開発目標 (MDGs)」、「万人のための教育 (EFA)」、「国連識字の10年 (UNLD)」といった教育に関する国際的な取り組みと DESD との関係など、DESD 及び ESD とは何かを明らかにしている。その上で、準国家、国家、地域、国際のあらゆるレベル、また政府、市民社会・NGO、民間というあらゆる領域において、それぞれが主体者意識をもって DESD に取り組めるよう、具体的な戦略や段階的目標を示している。さらに、附属文書では、ESD の成立までの経緯やその目的、特徴など、ESD の本質が詳しく記されている。このように IIS は、各国が ESD についての戦略をたてる際の枠組みを提供しており、また各レベル・領域における実践の拠り所となっている。

ESD の実践の真価を問う際の一つの基準となるものが、実践における「価値観」の扱いである。IIS においても、DESD の第一の目的を「持続可能な開発の原則、価値観、実践を、教育と学習のあらゆる側面に組み込むこと」としているように、人々の思考や行為、そして社会や国の発展を方向づける「価値観」は、持続可能な未来に向けて社会転換を目指す ESD において重要な役割を担っている。しかし、IIS はそれを既成のものとするのではなく、地域の状況や文化に適した形で「創造」するものであるとしている。それには、自分自身や社会がもつ価値観を理解し、これらを「持続可能性という文脈の中で評価する」スキルが求められ、こうした一連のスキルの習得は ESD の中核に位置づけられている。

そしてこの価値観を創造するスキルは、「質の高い教育」において培われる。それは、「学際的・ホリスティックであること」(interdisciplinary and holistic)、「価値観主導であること」(values-driven)、「批判的思考と問題解決を伴うこと」(critical thinking and problem solving)、「多様な方法をとること」(multi-method)、「参加型の意思決定があること」(participatory decision-making)、「地域に関連性があること」(locally relevant) に配慮した教育である。IIS はこれらを ESD を特徴づけるものであるとし⁸、「質の高い教育」を DESD の目標及び ESD の主眼点の一つとしてあげている。

では、ESD 園における教育活動は、IIS が掲げる「質の高い教育」の要素を満たし、価値観の創造へとつながるものであろうか。ESD 園の活動目標は、情感、認知、技能面にわたるものであり、また活動原則として実践性、主動性、協同性を掲げている。それは、生徒の主体性を重視した探求型・体験型学習など、中国の ESD の特徴を取り入れており⁹、従来の知識の習得に重点を置いた「つめこみ式教育」(「灌輸式教育」)や「受験教育」(「応試教育」)を克服するものであるといえよう。しかし、ESD 園において生徒は、蟹島のエコロジー農業や資源・エネルギーの循環システム、またこれらを支える科学技術といった「成果」を学ぶことが期待されているということに留意したい。

「蟹島では、技術員は技術を操作するモデルであり、特色ある農業経験の紹介者であり、教師と生徒は模倣する者であり、学習者である；学校では、教師は理論や知識の伝授者であり、生徒は知識を受け入れる者である；家庭では生徒は自主的な実践者であり、農業の新しい科学技術を広める者である。教師は、監督者であり、補導者である¹⁰」。

中国の ESD 研究においても、「生徒を自分よりも低い立場にあると見なし、(知識を)受け入れる容器として扱うのではなく、教師と同等の地位にあり、互いに交流、学習し、生き生きとした現実的かつ能動的な人間として見なすべきである¹¹」というように、教師と生徒の関係の見直しが求められている。しかし、ESD 園では上述のように、「教える者と教えられる者」という固定化された関係が想定されている。

このように「ある『成果』を固定化された関係の中で学ぶ」という学習においては、とりわけ ESD の特徴の一つである「批判的思考」を育む契機は見出されない。批判的思考は、価値観を創造するための第一歩である。なぜなら、既成の価値観を「批判的」に問い直し、「これまで人類がたどってきた発展の道を改めて考える¹²」ところから、持続可能な未来へ向けた新たな価値観の創造が始まるからである。

「循環型経済は、社会の持続可能な発展の最も先進的な模式である¹³」と蟹島の創設者で代表取締役を務める付氏は語る。確かに蟹島は、「環境保護と経済発展」の両立という優れた事例を示している。しかし、ESD をめぐっては、環境や社会、文化的側面をより重視する立場など、多様な価値観が存在する。このように ESD が価値観に関わる問題である以上、一つの既成の価値観を教えるべきではないだろう。今後、ESD 園の教育活動が、批判的思考を育み、また価値観を創造する契機を含んだ、「深まり」をもつ ESD へと進化していくことが期待される。

おわりに

従来の大量生産・大量消費・大量廃棄型の経済に代わる循環型経済は、資源の枯渇と環境汚染に直面する中国において、持続可能な発展のための最も有効な手段として考えられている。それは、2006年3月の全国人民代表大会において採択された「国民経済と社会発展の第11次5ヵ年計画」（「国民経済和社会発展第十一個五年規画」）においても指導原則の一つとして位置づけられている。これが近年、蟹島の実践が高く評価され、またそこにESD園が設立された所以である。

しかし、循環型経済は一つの「経済」モデルである。したがって、経済利益に結びつかなくなった時点でそれは成立しなくなり、またその発展には市場経済の拡大が前提となる。蟹島においても、循環型経済を拡大する構想が見られる。内モンゴル自治区や寧夏回族自治区といった、沿海部と比較して発展の遅れている地域を開発し、これらの地域で作られる有機食品を北京で加工し、北京の市場に出すという、「外都市基地＋北京加工＋北京市場」という構想である。確かに蟹島の事業拡大は、雇用の創出を通じて、貧困の削減や格差の是正に貢献する。しかしそこには、「企業」としての蟹島の姿があり、「先富論」を思い起こさせる。

「先富論」とは、1980年代の改革・開放政策のなかで鄧小平が打ち出した、「豊かになれる人は先に豊かになり、それはやがてすべての人々に波及する」という思想である。それは、中国に急速な経済発展をもたらした一方で、格差を拡大した。しかし、現在の中国の「持続可能な発展」計画はこれを否定するものではなく、経済を最優先におく発展図式を堅持するという意味において、むしろその延長線上に位置づけることができる。そこでは、いかにして環境負荷を減らし、経済発展を持続可能なものにしていくかが議論される。これが中国の「発展観」であり、また中国のESDが拠り所とする「価値観」である。

前述のとおり、ESDは本来、「価値観」そのものについて考える契機を含んでおり、そこにESDの実践の真価を問う基準がある。今後は本研究ノートをもとに、「価値観」をキーワードに中国のESD理論及び実践について考察を深め、また中国及び中国のESDがもつ「発展観」を明らかにしていきたい。

【註】

- 1 “Sustainable Development” 及び “Education for Sustainable Development” は、日本語では「持続可能な開発」及び「持続可能な開発のための教育」が定訳となっているが、中国語では「持続可能な発展」（原語：可持續發展）及び「持続可能な発展のための教育」（原語：可持續發展教育）という表記になる。ここでは、1）「開発」は「発展」のための手段である、2）「発展」のほうがより内発的な意味を含んでいる、3）「発展」のほうが経済発展を最優先課題に置く中国の発展戦略をより強調する、という理由から、中国の文脈においては“Development”を「発展」と訳す。この原語と日本語及び中国語の関係に関しては、今後さらに検討していく。
- 2 UNDP (2005), p.1
- 3 UNESCO (2004), pp.4-5
- 4 刘利民 (2006年), p.5
- 5 例えば、北京環境科学学会から「北京市グリーン・エコロジー園」を、また北京市及び朝陽区から「現代農業モデル園」及び「北京市農産業構造調整・重点試験モデル機関」、全国工農業観光モデル評定委員会から「全国農業観光モデル拠点」、北京市農業委員会及び北京観光リゾート農業業務協会から「北京市観光農業モデル

園」などの称号が与えられた。

- 6 史根東「中国持続可能な発展のための教育（ESD）プロジェクト2004 - 2006年回顧と2007年活動要点についての説明」（「UNESCO・ESD プロジェクト・第8回国家講習班」における公演資料、2006年12月14日）
- 7 北京市蟹島グリーン・エコ休暇村ホームページより。
- 8 これらの ESD の特徴は、2005年4月の第171回ユネスコ執行委員会に提出された最終草案において明記されているものである。同委員会において、最終草案をさらにまとめ、より戦略的な文書とすることが要請され、第172回執行委員会に提出された IIS では、大幅にページ数が削減され、これらの ESD の特徴も削除されている。この経緯についてはさらなる検討が求められるが、これらの特徴は依然として IIS の随所に散りばめられているため、本研究ノートでは「ESD を特徴づけるもの」としてそのまま採用した。
- 9 ユネスコ中国国内委員会が主導する ESD プロジェクトでは、ESD の実践原則を次のように定めている。教室での授業においては「主体的・探求的であること、全科目に ESD の理念が浸透していること、共同活動を行うこと、革新的な発展をとげること」（「主体探求、総合浸透、合作活動、創新発展」）、また、課外活動においては「主体的・探求的であること、社会に関心をもつこと、共同体験をもつこと、革新的な発展をとげること」（「主体探求、関心社会、合作体験、創新発展」）である。
- 10 「小中学生の実践活動」（北京蟹島エコ休暇村ホームページより）
- 11 田青（2003年）、p.126。（ ）内は執筆者による補足である。
- 12 前掲書、p.125
- 13 付秀平（2006年）、p.1

引用文献・資料

- 付秀平「可持続発展思想指導下の綠色生態度假建設」、中華人民共和国聯合國教科文組織全國委員會、聯合國教科文組織環境人口与可持續發展（EPD）教育項目全國工作委員會、聯合國教科文組織環境人口与可持續發展（EPD）教育項目全國工作委員會秘書處編『中国可持續發展教育』2006年第3期、pp.1-7
- 刘利民（北京教育委員會）「積極開展可持續發展教育，為提高首都教育質量作貢獻」、中華人民共和国聯合國教科文組織全國委員會、聯合國教科文組織環境人口与可持續發展（EPD）教育項目全國工作委員會、聯合國教科文組織環境人口与可持續發展（EPD）教育項目全國工作委員會秘書處編『中国可持續發展教育』2006年第5期、pp.2-5
- 田青「我国可持續發展教育初探」『中国人口・資源与環境』第13卷第3期、2003年、pp.125-127
- 中国21世紀議程管理中心『中国21世紀議程 - 中国21世紀人口、環境与發展白皮書』
- UNDP (2005), *China Human Development Report 2005*
- UNESCO (2004), *United Nations Decade of Education for Sustainable Development (2005-2014) Draft International Implementation Scheme*
- UNESCO (2005), *United Nations Decade of Education for Sustainable Development (2005-2014) International Implementation Scheme*
- 北京可持續發展教育協會・北京市蟹島綠色生態度假村有限公司『北京可持續發展教育園區 學生體驗活動手冊』
- その他、「北京蟹島エコ休暇村」パンフレット

参考 URL

- 北京蟹島エコ休暇村ホームページ（中国語）<http://www.xiedao.com>
- ユネスコ「中国 環境・人口・持続可能な発展のための教育（EPD）」プロジェクトホームページ（中国語）

<http://www.eepdinchina.com>

ユネスコ・バンコク事務所ホームページ（英語） <http://www.unescobkk.org>

本研究ノートは、平成18年度科学研究費補助金（基盤研究C）「アジア太平洋地域の持続可能な開発のための教育に関する国際研究集会に向けた企画調査」（課題番号18633010）（研究代表者 国立教育政策研究所・永田佳之）において、平成18年12月10日から16日に中国・北京市で実施した調査に基づいて執筆したものである。